

緒 言

紀要編集委員会

本紀要第81号の特集は、2011年3月の東日本大震災から10年を迎え、私たちの社会に、心に何が起こったのか、また何が変化したのかをテーマに、9名の先生に、原稿の執筆を依頼した。その方々の多くは2011年12月刊行の本学紀要第61号・62号合併号特集に執筆をお願いした方々である。

私たちは個人として、研究者として、また教員としてこの10年をそれぞれの場で生きてきた。この10年間の意味を各自の視点から問うてみたいというのが編集委員会の意図であった。その意図に見事に、いやそれ以上に応えていただいたのが、下記掲載の文章である。

私たちは、個人的被害の規模は別にして、この大災害の現実にも多寡を問わず傷ついていることを覚えずにはいられない。被災地に暮らす人間として、震災を経験し、被害を見聞し、また研究者として問題を追求し、それを学生たちに伝えようとしてきた。研究者として客観的に事実に向かい合い、それを言葉にすることで学生たちに伝え、残そうとしてきたのである。その根本には、今も心的外傷が残り、そしてそれを忘れてはならないという決意がある。あらためて、この10年がどのような意味を持ち、読者諸氏にいかなる問いかけを發するのか、編集子として大いに期待できる特集となった。執筆者諸氏に、紙面を借り感謝すると同時に、皆さまにこの特集をそれぞれの立場でぜひ受け止めて頂きたいと願うものである。

東日本大震災からの10年、その現実と変容

佐々木 公 明

2011年3月11日14時46分に私は、「特別業務処理室」で二人の副学長、大学事務長と総務課長とで、3月15日開催予定の運営会議のための打ち合わせをしていた。部屋の壁が横に激しく波打つ地震だった。春休みで、授業はなかったが、キャンパスには少なからずの学生たちもいた。バスをはじめ鉄道もストップし、帰宅できない学生たちが40～50名がいたであろうか？多目的ホールを“避難所”として設定し、体育館からいつもは選手合宿用に使っているマット、布団を提供してもらい、幼稚園が備蓄していた食料を持ち込んでもらい、教職員10数名、総勢60～70名が泊まり込んだ。私も2泊した。13日には避難所にいた学生たちを手分けして車に乗せて全員を帰宅させることができた。

2泊3日の多人数の食を賄うのは苦勞した。幼稚園の備蓄だけでは無論足りず、隣の棟の生協から運び出した（後日清算させていただいた）ものを用いた。自然発生的に、避難所の食料を管理するリーダーが事務職員の中からでて、私たちは彼女の厳格な指示に従って、計画的に食事を配分した。見事な采配であった。事務職員の中には、寒い中、定期的に自家発電機用のガソリンを給油してくれる人もいた。私は給油している彼の顔が窓の外から見えるたびに、不思議な安心感を得た。この自家発電機のおかげで、テレビを見ることができたし、多くの携帯